



年 組 名 前

道新 ワークシート

ネクスコ東日本、岩見沢で



【岩見沢】東日本高速道路（ネクスコ東日本）北海道支社は17日、道央道岩見沢インターチェンジ（IC）付近で、自社で進めるロータリー除雪車の自動化の開発状況を報道陣に公開した。今冬は岩見沢IC―三笠IC間で実際に除雪しながら試験を重ねる方針で、2023年度の実用化を目指す。

（浦崎竜馬）

ロータリー除雪車は雪を前方の回転羽根で切り崩して吸い込み、「シューター」と呼ばれる筒状の装置で路外に吹き飛ばす。現状では

除雪作業は2人1組で行い、1人が車両を運転し、もう1人が安全を確認しながらシューターを操作する。

同社は労働人口の減少や熟練作業員の高齢化を見据え、19年に自動化の開発に着手。通常の衛星利用測位システム（GPS）より誤差が少ない準天頂衛星「みちびき」を使い、運転手がハンドルやアクセルに触れずに自動で走る「自律走行」の試験を重ねてきた。

本年度は実際の高速道路を使い、路面が雪で凹凸のある状態での「自律走行」試験に加え、作業員が操作せずに道路標識やスノーポールを避けながらシューターで雪を飛ばす「自動除雪」の検証を行う。

17日は道央道の岩見沢ICから1キロほど三笠寄りの区間約300メートルで報道陣に実演を公開した。事前に熟練作業員がシューターを操作した動きと地図情報を組み合わせたプログラムに従い、ロータリー除雪車は時速3キロ程度で走行しながら、道路標識が近づくと自動でシューターの高さや角度を変えていった。

同社は22年度中に「自律走行」と「自動除雪」の技術を完成させ、23年度から作業員1人が乗車するロータリー除雪車の運行を始める方針。担当者は「いかに効率よく安心、安全を提供するか。現在は作業員不足の問題は生じていないが、働き方改革の観点も含めて取り組みを進めたい」と話していた。

乗車した作業員は手を触れず、車両走行や除雪装置の操作を自動で行ったロータリー除雪車の実演（大島拓人撮影）

自動除雪車 実演を公開 23年度、高速道で実用化へ

年11月18日（木）朝刊 地方 空知 17ページ（記事は一部再編集しています）

- ①高速道路での自動除雪車の実用化は、何年度からの予定ですか。
- ②自動除雪車は、2つの技術を自動化することで可能になります。自動除雪車が行うのは「自動除雪」と、もう一つは何でしょう。
- ③情報技術を活用した自動除雪車は、どのような点でよいといえるでしょうか。あなたの考えを書きましょう。